八ヶ岳高原に位置するある村の変遷
～村の絆と兼業の情景～

2005 年 1 月

第二文学部社会人間系専修 2 年
八巻　あい子

目次

はじめに.....2
1.　高根町の成立.....3
2.　地形.....3
2.1 高根町の地形.....3
2.2 箕輪大坪の地形.....4
3.　歴史.....4
3.1 高根町の歴史.....4
3.2 箕輪／大坪の歴史.....4
4.　大坪の戦後：　昭和 20～30 年代.....5
4.1 農地解放.....5
4.2 稲作と季節.....6
4.3 養蚕.....6
4.4 田植え.....7
4.5 農作業と村の行事.....8
5.　昭和 40 年代～60 年代.....11
5.1 転作作物への挑戦.....11
5.2 現金収入の道.....12
5.3　整備される農地.....13
6.　平成に入って.....14
むすび.....15

図 1 高根町の位置.....17
図 2　高根町南部.....17
図 3　箕輪大坪.....17
表 1　高根町の成立.....18

はじめに

日本の製造業の多くが安価な労働力を求めて中国へ生産拠点をシフトしている。めざましい経済発展を続ける中国を下から支えているのが、内陸部の貧しい農村である。これらの農村は、安価な労働力の提供と億単位の農村余剰労働力削減の両面から、経済発展に貢献しているのである。これと同じような状況を、戦後日本の農村も体験してきた。そしてその過程で、大多数の農村は疲弊し、村の存在の基本である農業さえも放棄し、「過疎」という言葉が多くの農山村を形容する言葉となった。

日本の農山村は、「ムラ」として閉鎖的社会の代名詞として使われることが多い。しかし、実際には外部社会とつながり、その影響を受ながら、存続のために自らの在り方を変え続けており、その結果として過疎があり発展がある。本稿では、八ヶ岳南麓に位置する山梨県北杜市高根町（旧北巨摩郡高根町）南端の小さな集落、大坪に注目し、戦後、人々はどのように暮し、どのように地域社会と繋がり、集落としての絆を保ってきたかを眺める。

1. 高根町の成立

高根町は、山梨県と長野県の県境に位置している（図１参照）。高根町の成立過程は表１の通りである。明治の大合併の後、昭和 29 年（1954）高根町の前身である高根村が誕生した。その後、昭和 31（1956）年清里村を編入合併し、昭和 37（1962）年 10 月 1 日に町制を敷いた。合併の基本方針によると「新村は、八ヶ岳高原の農村として農業を主軸とし、養蚕・畜産等を加味した総合的農業経営の完成をはかると共に、県道長坂―箕輪線沿線の商業地区の発展と相まって交通網を整備し、地域社会の一体的発展を意図する」とある（高根町 1990 上巻,p.229）50 年後の今日、意図していた商業地区は衰退の一途を辿り、養蚕は消滅し、農業形態も大きく変わった。そして、平成の大合併により、高根町は今年（2004）11 月に誕生する北杜市の一部として生まれ変わる。

本稿の対象集落である大坪は、箕輪村⇒安都那村⇒高根村（町）へと過去 130 年の間にその所属が変わってきた。安都那村は、明治７年（1874）に箕輪新町、村山東割村、箕輪村が合併してできたものであり、昭和 29 年高根村誕生時点では、安都玉村に継ぐ面積と人口を有していた。

2. 地形

2.1 高根町の地形

山梨県高根町の町域は、標高 600mの最南端から八ヶ岳の主峰赤岳頂上の 2,899mに広がるが、居住地域は、600m～1,300mに位置する。町は、八ヶ岳の溶岩の粉砕物や噴火による堆積物からなる表土の上に建てられている。八ヶ岳の南麓は、尾根と輻射谷が交互に南北に走っているため、集落の配列にも同じ傾向が見られる。集落内も南北に走る道路に沿って細長く家々が並ぶ型が多い。それらの集落を結ぶために要所で県道が東

西に走り、町道と格子状の道路網をつくっている（図 2 参照）。

標高 600mから 1,000mの緩斜面の尾根上には、縄文時代から平安期にかけての遺跡が数多く発見されており、早い時代から集落がつくられていたと考えられている。現在の集落も、台地上の尾根または緩斜面に集落が立地し、谷底あるいはその斜面が水田やその他の耕地となっている。火山裾野であるこの町域は、土地が乾燥しており、扇状地と同じように水に乏しい地域であったため、集落立地は、水との関係が基本条件であった。標高 750mから 800m付近には幾つかの涌水があるが、江戸時代には幾つもの井戸や堰がつくられ、水不足を克服する努力がなされた。

2.2 箕輪大坪の地形

大坪が属する箕輪地区は、標高 650～730m 付近に位置し、地区の東側を国道 141 線が、その内側に近年建設されたバイパスが南北に走っている。箕輪地区は、大坪のほか、行政的には８つの集落に区分される。「箕輪」は、旧くは「皆波」とも書き、『甲斐国志』の「箕輪村　堤、大坪、横森、海道、大森」の項には、「本村ノ地形凹ニシテ箕ニ似タリ　又右左口（うばぐち）村円楽寺所蔵　寛永四年大般若経ノ跋ニ、於テ逸見ノ庄皆波ノ郷尾崎ノ草庵云々トアルハ、本村ノ事ナルベシ」とある（松平定能 1966, p.221）。

大坪は、猫沢と雲雀沢と箕輪堰の間に広がる大坪原の尾根上にある。この尾根の南端は「城山」と呼ばれる。名前の由来は、中世「大坪砦」が築かれていたことによるが、武田氏没落後、北条、徳川の領有を経て廃城となった。遺構は現在ではすっかり開墾され往時を偲ぶものはなにもない。

3.　歴史

3.1 高根町の歴史

町内には、縄文時代の遺跡が全域にわたって発見されている。隣接の町村の遺跡と合わせる、八ヶ岳の西南から東南の一体は、「縄文の回廊」と呼ばれるほどで、一大文化圏を形成していたものと考えられている。平安から中世にかけての遺跡は、町の東側から西側の特に海抜 700m前後のところに集中してみられる。

律令制度の確立により、全国は畿内・七道の行政区にわかれ、その下に国・郡・里（のちの郷）が設けられた。甲斐国には山梨・八代・巨摩・都留の四郡があったことが知られている。このうち、巨摩郡は９郷からなり、現在の北巨摩郡の大部分に相当する地域には逸見・真衣・余戸の３郷がおかれたといわれている。逸見郷の正確な領域については諸説あるが、高根町の町域は逸見（へみ）郷に属したと考えられている。しかし、現在、逸見という地名はない。

3.2 箕輪／大坪の歴史

大坪が属する箕輪は、上述の通り中巨摩郡中道町右左口にある円楽寺の大般若経にも載っている。旧い郷にはその草分けとなるような氏族がいる。箕輪のほぼ中央に位置する集落に久保がある。その北東側に青田下りと呼ばれている沢の北端に清水一族

が 5 軒ある。沢の中央にある家は「大家」と呼ばれ、一族が、青田下りを見渡す場所、沢の北端、灌漑用水の取り入れ口近くに屋敷を構えていることを考えると、清水氏が中心となってこの沢の開発を行なったものと考えられている。青田下りの名前の由来は不明だが、その東西の沢と比較すると沢の深さも浅く、日当たりもよい上、区画も広い（高根町 1990、上巻 p.245-6）。大坪はこの青田下りの下流に位置する。

大坪集落の家々の間には、大坪用水と呼ばれる水路がある。この水路は、集落北側 800mの地点で、雲雀沢から取水し、人家の北西部で二手に分流し、一本は南流、もう一本は東流し、いずれも屋敷に引き込まれるかその前を流れている。この用水は秋の彼岸から春の彼岸まで通水し、冬季の防火用水と井戸水確保として利用されていたが、現在は冬季でさえ通水されていない。大坪集落には、その東側を流れる箕輪堰と西側を流れる雲雀沢の二本の水利がある。雲雀沢は六ヶ村堰とよばれる用水で箕輪堰とは異なるものである。

六ヶ村堰の開削についてはさだかではないが、寛永 16 年（1639）頃竣工したらしい。川俣川の東沢と西沢の水を集め、山麓を迂回して全長４km に及び堰を作り、東井出台地に引き入れた後、10 箇所の水門によって分水し、6 つの村を潤すというものであったが、迂回路が長いため、しばしば決壊したり、漏水があったりして、日照りの時には水不足をきたし本来の機能を果たせないということが多くあった。現在の堰は、大正時代より逐次迂回路をなくすなど、漏水を防ぐ工夫を重ねた結果、豊富な水で下流域を潤している。流路延長 14km、受益面積 550ha に及ぶ。一方、箕輪堰は、明暦 3 年（1657）頃竣工したものと言われ、川俣川から取水し、箕輪新町、箕輪地区の水田を潤す。流路延長は 9km で、受益面積は 300ha である（高根町 1990 下巻、p.44）。

4. 大坪の戦後： 昭和 20〜30 年代

人々は貧しかったが、戦争が終わり、農地解放のおかげで小作農であった多くの農家が土地を手に入れ、希望を持って働くことが出来た時代であった。

4.1 農地解放

高根町域でも、昭和 21（1946）年 12 月 20 日、農地委員会が発足し、農地等の買収売渡しの準備を始めた。それぞれ集落ごとに、地域に精通した者が農地委員会補助員となり、昭和 20（1945）年 11 月 23 日現在の自作地、小作地、貸付地の一筆ごとの申告書を農地の所有者、耕作者の全員から徴収し、照合・調査を行ない正確な自作地、貸付地、小作地の面積を掌握した（高根町 1990,上巻 p.759）。このようにして、翌 22（1947）年 7 月 2 日、小作地買収事業が一斉に開始された。買収した農地の売渡しは、原則として昭和 20 年 11 月 23 日現在その農地を耕作し、引き続き農業経営に従事している者に限られた（高根町 1990、上巻 p.759）。

元来、大坪集落の土地は、3 軒の地主によって握られていた。その内、もっとも多くの土地を有したのは A 家であり、小作米が年間 3,000 俵と言われ、大きな米蔵を幾つ

も有する有数の地主であった。2 番目は、B 家、C 家は A 家の十分の一程の規模であった。その他、若干の自作農がいた。

大坪における農地解放は、リベラルな B 家が主導的役割を果たし、スムーズな農地移転が可能となった。その結果、多くの自作農が誕生した。牧野は主として買収された農地に付帯し、宅地及び建物は、自作農となった農民が長期間居住し、農業経営に精進しているものに原則として売り渡された。その他、食糧増産と経営の安定を鑑み、大坪原の開墾も進められた。大坪原は、尾根上にあり東西両側とも沢の水面まで数十メートルの高さに位置するため畑作に限られたが、それでも昭和 20〜30 年代にかけては陸稲が栽培されていた。

終戦当時、大坪集落は、戸数 24 戸であった。集落は、上（かみ）、中（なか）、下（しも）の三つの組から構成されていた。組というのは、家々の集まりで、地理的位置から便宜上、上記の三つに分類されていたが、冠婚葬祭などはこの組内の世話になるのである。戸主が戦死した家２戸、復員者を有する家 10 戸、その他に一時的滞在者として、兄弟、親戚に身を寄せる疎開家族が２戸、引揚家庭１戸であった。昭和 35 年における「高根町年齢（5 歳階級）・男女別人口及び性比」によると、①10〜14 歳層および②5〜9 歳層が飛びぬけて多く、全体に対する比率が男子で 7.3%と 6.5%、女子でも 6.3%と 5.6%となっており、いわゆる団塊の世代層が形成されている。一方、35〜39 歳層の性別比は、女性 100 とした場合、男性 79.67 であり、その前後の階級と極端な差があり、戦争の爪あとがみてとれる。大坪集落でも、団塊の世代にあたる上述①の階級だけみても、実に 12 戸で 18 人が誕生している。

4.2 稲作と季節

栽培作物としては、水稲が中心であった。一毛作であるが、裏作（冬作物）として大麦、小麦が作られていた。自家用であるだけでなく、冬作物としては唯一の換金作物だった。集落の一年は稲作の周期によって回っていた。山間高冷地で、安全でより多くの収穫を得るためには一日も早い田植えが必要であった。毎年、４月も下旬となると苗代の準備が始まった。「八十八夜の別れ霜」と言われ、立春からかぞえて 88 日目の５月 2 日、農作業の目安となった。畔塗り、麦刈り、代かき、田植えと一連の農作業の始まりである。高根町のように揚げ堰の水を用いている地帯での田植えは、灌漑用水の調整等もあって、上流から順に田植えをする。大坪集落の場合、町の最下流に位置するため水の確保が問題だった。上流より先に田植えをすることはできず、水が来たら一気に田植えをする必要があった。田植えは刈入れと同じで一家総出の仕事だった。その上、春蚕の最盛期、麦の収穫が重なり一年でも最も忙しい時期である。その為、６月と 10 月になると学校は農繁期休暇、「農休み」で一週間程度の休みとなった。

4.3 養蚕

養蚕は、多くの農家が農作業の傍ら従事していた。「お蚕さん」と呼ばれる大切な収

入源であった。蚕は、桑を食べて発育する期間（齢）と、食べずに脱皮の準備をする期間（眠）を交互に繰り返し、第五齢で成熟する。大変なのは、発育する時期である。食欲が大変旺盛なため、夜昼なく桑を与えつづけなければならない。蚕に桑を与えて、桑畑へ行って桑を刈り取り運んでこなければならない。「蚕がひきる」（繭を作る準備段階）と大変である。一家総出で何千匹もの蚕を拾い出しさなければならない。まさに猫の手も借りたい時期となる。「お結い」で、蚕を飼っていない農家の助けを頼むこともある。「お結い」とは、農作業などで、労力を交換し助け合うことである。忙しいときはお互いさま、持ちつ持たれつの関係が活きる。

蚕の餌となる桑は大変利用価値の高い作物であった。落葉高木だが、作業がし易いように毎年剪定する。葉は蚕の重要な餌に、樹皮は黄色染料に用いられ、またその繊維から布、ロープ、和紙などを製造する。そのため、蚕に葉を与えた後の枝は、釜茹でされ皮を剥いで天日干し出荷された。30 年代までは、川岸に大釜を設置し、茹でた桑の皮を剥ぐ女性達の姿が見られた。

4.4 田植え

田植えの時期になると毎年、町（村）内の標高千メートル以上に位置する浅川や樫山から、代掻き用の農耕馬を曳いた男性と一緒に、「早乙女（おそーとめ）さん」たちの一団が、今で言うところの出稼ぎに下って来た。浅川、樫山地区は、大門川左岸の断崖上にある明治以前の旧村であるが、高冷地であることから水稲栽培にはあまり適さず、野菜、酪農なども行なわれていた。しかし、酪農も今日のように需要があるわけでもなく、交通網も未整備で消費地から遠いこともあり、生活の糧を得ることが大変であった。このような状況下で、早乙女さんとなって、下界に下りて来ていたのである。大坪にとっても彼女たちは無くてはならない存在だった。集落内に寄宿し家々の田植えを手伝った。夜になると地域の青年団の集まりに出かけるのが彼女たちの楽しみだった。田植えの時期が終わると彼女たちは帰っていく。帰り道は決まっていた。遠回りして隣町で映画を楽しみ、手にしたばかりの賃金で買い物をし、汽車にのって清里まで行き、そこから徒歩で帰った。早乙女たちの中には、この仕事が縁で、近隣集落に嫁いで来たものも何人かいた。

田植えは農家にとって一大イベントである。老若男女まさに一家総出だった。また、上述のように水が来たら一気にしなければならなかった。植え縄にそって横一列に早乙女が並び、その後ろから子どもや年よりが大きく育った苗束を、早乙女たちが取りやすいように水田の所々へ投げ込んでいた。苗運びは学校が休みとなった子どもの仕事だった。植え縄を利用して正条植えをするようになったのは、回転除草機が普及するようになったためと言われている。バラバラに植えていたのでは、田の中を、この回転除草機を押して歩けないからである。田植えを始めるにあたって、豊作を願い、苗束に赤飯をそえて田の神様にお供えした。田植えが終わったら、田の水を切らさないようにしなければならなかった。朝、夕、田の水を見るだけでなく、時には、「水

引き」と言って、夜遅く集落の人々が上流まで行って水を確保してこなければならないこともあった。集落の田植えが全部終了したら、春からの一連の農作業が一段落したことになる。家々では、餅をつき、「農休みのあべかわ」、餅に黒蜜と黄粉をまぶした安倍川餅のご馳走を楽しんだ。

4.5 農作業と村の行事

農休みも一日二日、畑の草取り、そのうちには田の草取りもしなければならない。重労働で嫌われたのは、田の草取りだった。田の草取りは、草を取るとともに、稲の株回りの土を柔らかくすることにあった。しかし、炎天下、背中からの暑さと稲の間の草いきれ、稲の穂先で目を突かないように気を付けながら、中腰で水田の泥の中を這いずり回らなければならない、最も過酷な農作業だった。これを稲の花が咲くまでに３回程しなければならない。水田の中をはいずりまわるのが終わると、稲の手入れも大方終わったことになり、小豆ぼうとうを作って田の神様に供えるとともに、家中で食べた。小豆ぼうとうとは、お汁粉の中にお餅の変わりに、ほうとう（山梨県特有のうどん）が入っているものである。

農民の唯一の願いは豊作である。土用に入って 3 日目に「虫送り」が行われる。農作物につく害虫を集落の外へ追い出す祭りである。松明をともし祈願ののち、鉦や太鼓に合わせて行列をつくり集落の外れまで行進した。8 月初旬は「お墓参り」がある。大坪の墓参りは 8 月 1 日である。集落によっては 7 日のところもある。いずれも農作業の都合により決められた。8 月１日はお墓参りだけで、墓地の草取りや清掃はそれ以前に済ませておかなければならない。お墓参りには、嫁に行った娘たち、家を出ている息子たちも帰って来てにぎやかに行なうのが慣わしだ。庭先に咲いている花、井戸水、線香、それにお供え用のご飯、アラヨギ、をお墓に持参する。アラヨギとは、洗米にインゲン豆、ニンジン、ナスのさいの目切りを混ぜた物を、柿の葉の載せ供えるものである。

8 月 13 日は「お盆さん」を迎える日である。13 日の午後は、各家で座敷の壁際に盆棚を用意する。机の上に山から切って来た萱を敷き、その上に位牌、仏像、仏具など仏壇の中に安置してあるものを並べる。涅槃図のような掛け軸を背後の壁に掛ける。キュウリとナスで馬、牛を作る。足は萱の茎で、尻尾は畑のモウロコシの毛でつくる。背にはおみやげの荷物が乗せられるように、荷縄になぞらえて冷麦や蕎麦など麺類を掛ける。日が暮れると、「じょう口（屋敷の入口）」で、麦わら、藁などを用いて迎え火をたく。家族全員が揃い、線香をあげながら、「お盆さん、お盆さん、この明かりでおいでなって」と三回唱える。家によっては、墓地までお盆さんを迎えに行く家もある。水をもって迎え火を焚いている間に墓地へ向かい、「お盆さん」の通り道を水で清めながら家に案内するのである。

「お盆さん」は、家族が一堂に会するときであった。外に働きに出ていた者たちも帰ってきて、集落が華やぐ時期でもあった。家族や友人達の再会を楽しみ、盆踊りや

花火会を楽しんだ。久し振りに帰ってきた「お盆さん」と「生き仏さん」（家族）のためにご馳走をした。安倍川餅はなくてはならないものであった。その他に、てんぷら、冷麦が並べられた。14 日あるいは 15 日には、檀那寺の住職が檀家をお経を上げに回る。大坪集落は、ほとんどが隣町の甲斐源氏ゆかりの寺、曹洞宗清光寺の檀家である。16 日の朝は、「お盆さん」にお供えした料理をかぼちゃの葉に包み、ナスやキュウリの馬や牛、供花を箕に入れて、川に流しに行く。大坪の上組は「橋場」が流す場所である。橋場は水田の間を流れる川で、橋の上でみな線香を上げて「お盆さん」に別れを告げる。夕方には、「お盆さん、お盆さん、この明かりでお急ぎになって」と言いながら、送り火を焚く。農家にとってお盆などは数少ない休みであった。このような時に、田畑に出て働くことは、「怠け者の節句働き」と言って嫌われた。

9 月 1 日は「七社さん」のお祭りである。その昔、現在、隣の集落にある建部神社は大坪にあったと記録が残っているが、なぜか引越しをしてしまい大坪に神社はない。七社さんのお祭りの日は、男の子たちは神輿を担ぎ、女の子たちは太鼓を乗せた花で飾られたリャーカーを皆で引いて、太鼓の音とともに集落を練り歩いた。子ども達の楽しみは、各家で振舞われる甘い麦茶であった。神輿は大人達が戦後造ったもので、俵を紙製の花で飾り頂上に手作りの鳳凰を乗せたものであったが、大坪唯一の神輿だった。七社さんへの道の両側には、各家の当主、長男、長女の名前入りの提灯が下げ、夜になると提灯に灯がともった。皆、その下のそぞろ歩きを楽しんだ。

秋の彼岸、十五夜、十三夜、十日夜を祝った。「十五夜さん」は、旧暦 8 月 15 日の夜だった。東側の縁側にお供え台を作り、ススキ、秋の草花、お団子、枝豆、茹で栗などを上げた。子ども達は、「あげたかい、さげたかい」と言いながら集落の中を回り、お供えものをもらって歩いた。十日夜は、旧暦 10 月 10 日で、すでに寒い時期である。「お月さん」へは、お餅と大根を供えた。秋の実りを神に感謝するものだった。「十日夜、十日夜、十の餅を食いてえな」と子ども達ははしゃいだ。お餅は、農村の最大のご馳走であった。

田植えに次ぐ大仕事が刈入れだった。稲刈り、脱穀、籾摺り、供出（政府への売渡し）まで休みなく働くことになる。小中学校は再び休みとなった。秋晴れの続くときに一気に稲刈りを済ませなければならない。刈り取った稲は、藁が乾くまで地干し（刈り取ったあとそのまま地面に広げて置いて乾かす方法）をする。この間に雨が降ると大変である。田んぼに広がった藁をすべて裏返しにしてカビが生えるのを防がなければならない。子どもも総動員されて裏返し作業が行なわれた。地干しはこのような手間があるのと、米の品質低下を招くということで、ウシ（稲架）に掛けるようになった。大坪の稲架は、一段だけの小さなものだった。小束にされた稲を掛けて乾燥させる。脱穀は、稲束を供給する者、脱穀する者、脱穀し終えた藁を束ねる者、籾を袋詰めする者、禾の片付けをする者等々に分担してやっても、籾摺りと同じで、朝から夜遅くまで働かなければならに重労働であった。近所の人達の協力が無ければ出来

ない仕事だった。米の供出は、昭和 36 年に 30kg 入りの紙袋となるまでは、60kg 入りの俵が使われた。女性でも一俵担ぎ上げることができる人は、皆から一目置かれていた。供出が終わると一年の稲作が完了したことになる。

農作業が終わると、映画会が開かれることがあった。会場は、大きな庭裏庭を持つ家だった。当日は、朝から青年団の人たちが協力しあって、会場の設営をし、切符を売った。この映画会は、大坪だけでなく近隣地域の人々の楽しみでもあったため、秋寒い夜にもかかわらず遠くから多くの人が出かけてきた。

12 月に入ると農作業は一段落だが、年越し前に片付けなければならにことがたくさんあった。木の葉掃きは、農家にとっては大事なことだった。大切な有機肥料として田畑に入れることができる上、薪を集めることもできた。山林を持っていない多くの農家は、お金を払ってまでも他の家の山林を掃かせてもらった。冬至にはかぼちゃを食べないといけない。冬至を過ぎてもかぼちゃを残して置くと娘が年をとってしまうといわれ、残ったかぼちゃは惜しげもなく捨てられた。寒い冬至に一番のごちそうは、「かぼちゃぼうとう」だった。年の暮れは、精算の時期でもあった。農家の主たる現金収入は、年に一度の米の売却代である。種代、肥料代、「おやてっと代」（農作業などのために一時的に雇用した人の賃金）、地代、買い物の代金等などは、農協に米の売却代金が入金する年の暮れに精算された。

12 月下旬になるとすす払い、餅つきなどがある。すす払いはまさに一年の間にい　ろりやかまどから出た煤を払う意味があり、20 日頃から行なわれた。餅つきも、29 日はくんち餅、苦餅と言って嫌われ、31 日は一夜餅と言って嫌われるので、日は注意して決める必要があった。遠方の親戚へ送る家では、2 日に分けて餅つきが行なわれた。最初は、送るための餅、次ぎは自家用で、鏡餅、お供えはもちろん、豆餅、青海苔を入れた豆餅、きび餅など各家自慢の餅が用意された。

子どもたちはすす払いや餅つきが終わるころ、書初めを始める。新年ではなく暮れに書初めを書く。お小遣い稼ぎである。何枚も書いて寒い中、近所の家々へ配って回ると、各家でお駄賃をくれた。どこの家でも、新年用に飾られた神棚には子どもたちの書初めがところ狭しと貼られていた。

大晦日には、いろいろな野菜を煮込んだものが供えられ正月三が日が開けるまで仏壇は閉じられた。お正月は神棚が主役である。神棚には新巻鮭、炭、みかん、干し柿などが御神酒のほかに上げられた。ラジオの紅白歌合戦を聞きながら、家族揃って年越しの膳を囲むのである。

一年の最初の行事は、元旦の若水を汲むことから始まる。若水で身を清め、お雑煮を作って神棚に供えた。年始回りは、集落中を回った。氏神様へ初詣をしてから、年始回りに出かけることが多かった。どこで挨拶をするか、入口か、座敷に上がるか等は、お互いの関係によって異なった。「大家」と呼ばれる家には、「子分衆」が朝早くから年始に訪れた。受ける側でも、暖かいコタツと茶菓子を用意して迎えた。子ど

もたちは、元旦は登校日だった。年始の挨拶をして帰りには紅白のお饅頭がお土産だった。

冬休みの子どもたちには楽しいことがたくさんあった。天神講もその一つである。たいてい 1 月 5 日頃行なわれた。小中学生を対象として、最高学年を中心に子供達の自主運営で行なわれた。準備は、子ども達が家々を回ってお汁粉に入れるお餅と会費を集めることから始まる。会費は、お菓子の購入などにあてられた。お天神講の日は、当番の家に集まってお汁粉を食べたり、ゲームをしたりして子どもたちは楽しんだ。午後には、筆でそれぞれの希望を書き、それをつけた笹をもって、皆で八幡様の裏にある天神様にお参りをした。お天神講は、小さい子も大きい子もそれぞれに楽しめる子どもの集まりだった。

冠婚葬祭のような、「おーざっちょ」（大勢の人が集まり食事の用意などをすること）は、「組の衆」の世話になるのが普通だった。買い物から食事の仕度まですべて当事者の家が属する組の人々が仕事を分担して取りし切ることになっていた。しかし、同じ組の人々がしてはいけないことが一つだけあった。それは、葬式の際の墓掘りだった。その「穴っぽり」は、他の組の男衆がすることになっていた。

5. 昭和 40 年代～60 年代

農家にとっては試練の時代、新しいことへの挑戦の時期でもあった。高度経済成長と交通網の発達、科学技術の発展は、大坪集落へも大きな変化をもたらした。

昭和 44（1969）年に、米の減反政策が実施されることになった。生産性の低い麦類の栽培が敬遠されるとともに、40 年代末から少しづつではあるが田植え機が導入され始めた。田植え時期が早い機械田植えの普及によって裏作物の栽培が不可能となり、より一層栽培量が減ることとなった。減反により空いた水田をいかに活用するか、新しい作物への転換が奨励されたが、経験の浅さと水田という特殊状況から、農家の努力にもかかわらず望ましい成果はなかなか得られなかった。その結果、兼業農家への進出が促進された。

5.1 転作作物への挑戦

昭和 32（1957）年国道 20 号線、甲州街道に笹子トンネルが開通すると、山梨県は東京への野菜供給地となることを目指した。甲府盆地周辺には、果物、野菜の抑制栽培が始まった。高根町においてもトマトの抑制栽培を有志が試みたが、経験の少なさ、病虫害などで伸び悩んだ。

昭和 44（1969）年には、集・出荷場に機械選果機が２台導入され箱詰めの労力が省かれたので、栽培面積の拡大が可能となった。昭和 51（1976）年 12 月の中央自動車道須玉インターチェンジの完成、61（1986）年の長坂インターの共用開始は、高根町と首都圏の距離を大幅に縮めた。一時、高度成長に伴う農村の労働力不足からトマト栽培農家数、面積ともに停滞したが、昭和 50（1975）年には、栽培面積、出荷量、

売上高とも県下一の大産地となった。選果場も更に拡充され、52（1977）年には青森県から従業員を雇いいれることになった（高根町 1990、下巻 p.83-89）。

大坪集落でも、多くの農家が減反対象となった水田にトマトを栽培するようになった。農作業の機械化と減反で、浅川、樫山の早乙女さんたちはすでに昔話となっていた。彼女たちの地域は、避暑地、酪農およびレタスなど高原野菜の供給地として脚光を浴びていた。トマトは、米とまた違ったタイプの、ある意味では米以上の集約労働型作物であった。毎日トマト畑に出て、わき芽を取り、成長し続ける茎を紐で支柱に縛り付け、夕方になると収穫をし、有線放送で流される市況に一喜一憂しながら夜中まで箱詰めをし、翌朝は選果場へ出荷するという作業を毎日繰り返さなければならないのである。その上、病虫害に弱いため、その管理も怠るわけにはゆかない。栽培初期は、水はけのよい土地を好むトマトには減反の水田は不向きで、病気に罹りやすく、思うように収穫できないこともあった。農業指導員のアドバイスを受けたり、隣近所の栽培者同士経験を交換したりしながら育てる日々であった。

その上、大坪集落は選果場まで遠く、当初は自分で運ばなければならなかったため、機動力も問題であった。出荷最盛期ともなるととても自転車では間に合わなく、機動力のある農家に運搬を依頼しなければならなかった。その後、町全体の生産量が飛躍的に増大したため、選果場も近代的設備を導入し、各集落に集荷所が設けられたことにより、栽培農家の負担は軽減された。

トマトの他に、レタス、いんげん、もろこし（ハニーバンダム）など、いろいろな換金作物が導入された。更に、果樹、葡萄、りんごなども昭和 50 年に入り奨励され、多くの水田がりんご畑に変わった。導入されたりんごは、矮化りんごと呼ばれるものであった。しかし、りんごは、気候、土壌などの問題から、収入を得るまでには相当な時間を費やし、途中で放棄されたりするものもあった。

5.2 現金収入の道

高度経済成長に伴う都会と農村の格差は拡大する一方であった。減反政策は厳しく実施された。減反をクリアした水田には、農協の検査済みの立て札が立てられた。クリアをしていない水田は、減反対象面積がまさに青田刈りされた。水田面積は減る一方だった。転換作物がいろいろと奨励された。その都度、上述のようにいろいろなことを試した。しかし、天候に左右される農業の中で、露地栽培の野菜類による収入は特に不安定だった。農業収入だけでは子どもに高等教育を受けさせることは難しかった。

少しでも家計の足しにするために、冬になると「土方」仕事をする人達が多くなった。道路網整備に伴う工事現場で働く仕事である。一種の失業対策事業でもあった。男女にかかわらず働ける人は出かけて行った。昭和 20～30 年代は、冬でも家の中でする作業があった。例えば、縄を綯う、俵を作る、ゴザを作るなど農作業に関係する藁仕事がいろいろとあった。しかし、既述の通り、高根町でも昭和 30 年代末に米は俵の変わりに紙袋で出荷されるようになった。養蚕で使う材料も藁から段ボール材へと変わっていた

うえ、養蚕自体も衰退していため、藁仕事も必要がなくなってしまった。

昭和 50 年代に入ると隣の集落に「ゴム工場」ができ、「工場(こうば)へ行く」人も出てきた。朝、工場へ出勤する前に農作業をし、昼休みには昼食を兼ねて自宅に戻り農作業をし、夕方、退社後また農作業をするという長時間労働をしていた。それでも、農業だけをしているより、毎月現金収入があることが魅力だった。その他にトラックの運転手なども現金収入の道だった。

高根町はリゾート地としての開発を進めていた。しかし、リゾート地は町の北部、清里方面に限られていた。大坪は、街からもリゾート地からも中途半端な場所にあった。大坪の女性たちの中には、ゴルフ場のキャディーやペンションの掃除婦として働き現金収入を得ようとする人たちもいた。

昭和 57 年に中央自動車道が全線開通をし、山梨県の首都圏へのアクセスは、格段に進歩した。県内には、地場産業として宝飾、ワイン製造、織物、和紙、印章などがあるが、いずれも甲府以東、以南の産業で、高根町が位置する北巨摩郡とは無縁であった。山梨県は加工組立型工業に成長を見込み、昭和 50 年代末から中核工業団地整備計画が県内で進められた。県の中核工業団地整備計画により、北巨摩郡にも峡北地域中核工業団地が高根町と須玉町との境に建設されはじめた。

5.3 整備される農地

農地の区画整備事業である圃場整備が大坪にもやってきた。小さく区切られていた水田は、機械化が可能となる大きな区画に再編された。圃場整備は農家にも負担が掛かるが、費用の大部分は補助金で賄われた。圃場整備を拒否することはできなかった。なぜならば、それは一農家に帰属する問題ではなく、他の農家の農地をも巻き込む問題だからである。しかし、圃場整備により大きな水田を確保しても、減反政策の続行により、稲作は出来ず、結局、補助金をもらって草が伸びるままに放置するか、労働力の少ない家は、誰かに貸し出すかしかなかった。しかし、兼業農家がほとんどになり、新たに水田を借りてまで耕作しようとする人もいなかった。一方、圃場整備事業は、土木作業員を必要としたため、それに従事することによりある程度の現金収入が見込めた。

圃場整備と共に農道の整備も進んだ。大坪の中の道は、町道だけでなく農道までもが簡易舗装された。毎年夏になると集落総出で草を刈り、道作り（手入れ）をしていた農道は修繕する必要もなくなった。路肩の草刈と車から投げ捨てられるゴミ拾いをするだけとなった。

二つの沢の合流地点に近い場所にある水田は、沢幅が狭く深いため機械化が難しかった。かつては全てのものを背負って担ぎ上げ下ろさなければならず、収穫時は特に大変だった。しかし、農道と圃場整備のおかげで車が入れるようになった。圃場整備は、どんどん進められていた。農業の近代化は、機動力を購入するために更に現金収入を得る手段を必要とした。機械化した農家は、機械していない農家、老人だけの農家の農作業

を請け負うようになった。車を手に入れた人々は、近隣の町や市まで通勤できるようになった。山梨交通バスは、乗客の減少により本数が極端に減り、それがまた乗客離れを起こすという悪循環に陥っていた。

6. 平成に入って

戦後、大坪集落の原動力であった世代の人々が徐々にこの世を去って行った。その人々の中に大卒は一人もいなかったが、孫の世代の多くは大学に進学した。多くの家で世代交代が進んだ。兼業農家の農作業も更なる機械化が進み、まさに昭和 20〜30 年代の「這う」農業から「歩く」農業へ、それがすでに「乗る」農業へと発展していた。田植えも昔のような一家総出でやる必要がなくなった。兼業農家であれば、日曜日に数時間田植え機に乗って運転すれば済むようになった。刈入れもしかりである。コンバインに乗って運転するだけで、刈入れ、脱穀、乾燥、袋詰までできるようになった。数十年前のように一家総出で格闘する必要はなくなった。

昭和も後半になって高根町と須玉町との境に建設されはじめた峡北地域中核工業団地には、三井農林・日本酸素等の企業が誘致された。これら企業の操業に伴い工場や下請け会社がこの地域の若年層の就職先となった。また、大坪からは車で 30 分程の韮崎市藤井町に建設された東京エレクトロンは、エレクトロニクスの検査機械で急成長し、高等学校卒業生を中心に多くの農業後継者の新たな就職先となり、現在に至るまで兼業農家として生き残る大きな原動力となっている。

集落のさまざまなことに深く時代が反映されるようになった。「お盆さん」を川へ流すことは河川汚染に繋がるとして土に埋められるようになった。冠婚葬祭は、自宅ですることが少なくなり、農協の経営する斎場や街の結婚式場が普通となった。「おおざっちょ」で「組の衆」を煩わせることはまれとなった。集落の「寄り合い」は「月例会」に早くから改められた。集落の行事は、圧倒的多数を占める兼業農家を考慮して、日曜日か夜間（月例会など）となり、内容も簡単なものに変更された。平日の昼間、田畑に出ている人をほとんど見かけなくなった。道を歩くのは、車が運転できない年寄りか、朝夕の登校時の子どもくらいとなった。その子どもたちも時には、親が車で送り迎えをする時代となった。専業農家は僅か 1 軒となった。

多くの家が改修あるいは建て替えられ二世帯住宅も出てきた。若夫婦は親たちと異なるライフスタイルを楽しむようになった。仕事が終わったら、車で隣町のファミリーレストンへ一家で食事に出かけることも珍しくなくなった。若い人々は標準語を話し、そのほとんどが仕事を持っていた。上述の地域中核工業団地計画以来、平成も十年代に入ると隣町および近隣集落に加工工場が出来るようになった。今まで町の北部にある観光地へ働きに行っていた人たちもそれらの加工工場へ転職するようになった。ほとんどの家が複数台の車を持つようになった。車は若い人々の必需品であった。

家に残った老夫婦は、孫の世話も必要なくなった。若夫婦が仕事に出掛ける前に、子

どもを保育園へ送り届けているからである。かと言って、昔ながらの方法で農作業をやろうとしてもできることは限られていた。国道を走る赤字続きの山梨交通バスは廃止され、代わりに高根町営バスが１日数往復運行されるようになった。町外の停留所は、駅と学校、病院の前だけに限られ、乗客は、朝夕の学生と町外の病院へ通う老人たちである。

大坪には外からの人々の流入も見られるようになった。大坪原の南を不動産業者が開発し、別荘地として売り出した。尾根の最南端、中世には大坪砦があった場所である。別荘族とは別に、大坪を終の棲家として移り住んでくる他県出身者たちも出てきた。それらの人々は、農業に従事しているわけではないが、集落の一員として受け入れられ、祭り行事や会合に参加するようになった。平成 10 年代に入り高根町の総合福祉施設が、大坪にある林を切り開いて建てられた。保育園、知的障害者施設、特別養護老人ホーム、高齢者住宅などが林の中に点在するこの総合福祉施設は、若干ではあるが大坪に新たな雇用機会をももたらした。

このような新しい住人の他に、定年後故郷に戻ってくる人、戻ろうと準備をしている人も増えてきた。生家を大々的に改修したり建てなおしたりして定年後の生活を始めた人あるいは始めようとしている人たちである。

むすび

大坪は、国道からも県道からも離れているため、どちらへ出るにも幾つかの集落を経る必要がある。このような地理的位置から、ともすると昔は「自給自足で孤立した集落」と見なされがちだが、実際には、物の動き、人の動きが集落を越え、地域を越えてあった。昭和 30 年代までは上述の「おそーとめさん」だけでなく、「富山の薬屋さん」、大坪には商店が一軒もなかったので、〇〇さんと苗字で呼ばれる行商の人たちが来た。時には、「刑務所を出たばかり」という押し売りや、「おこんじきさん」もやってきた。おこんじきさんとは乞食のことである。早乙女も乞食も「お」と「さん」をつけて呼ばれている。「おそーとめさん」も「おこんじきさん」も身近な、大切な人たちだった。おそーとめさんは、自分たちにとって一番大切な田植えにはなくてはならない人であり、「おこんじきさん」は自分たちの代わりをしてくれている人というような思いがあったのだろう。このような人々を通じて、外界との繋がりを保ち続けるだけでなく、大坪の人々も外へ出ていった。寺や神社への巡礼参り、農閑期の出稼ぎ、学校、就職と時代と共にその数を増した。

高度経済成長に取り残された日本の多くの村村は離村者を多く出し過疎地となった。高根町の中でも、集落によっては離農、離村が出ているが、大坪では一軒もなかった。また、農地を売却する家もでなかった。その理由の一つとして、地理的条件を挙げることができるだろう。既述の通り尾根の上に位置するため、河川の氾濫、山崩れなどの自然災害とは無縁である。高冷地の高根町ではあるが、その最南端に位置し

ている大坪は、他の地域と比較すると海抜が低い分、気候の厳しさが少ない。そのために、豊作不作はあったが、飢える程の状況には陥らなかった。また、農地解放により各戸がある程度耕作面積をもっていたことも、離農が起きなかった要因の一つとして考えられるであろう。しかし、同じ町内でも農地を手放していった例も少なくないことを考えると、単に耕作面積の大小だけでは説明がつかない。

大坪の人々が、能動的に時には受動的に時代の変化に合わせたことにより生活基盤を維持することができたと言える。人々は、農地解放によって自分のものとなった土地を護り、家族を護るために一所懸命働いた。それは、個々人の力だけでなく、人が、集落が、地域が、お互いが助け支えられていた。人々が意識するか否かにかかわらず、外部社会からの影響に対処し、変化し対応していった。それが結果的には、大坪集落としての紐帯を護ることにもなったと考えられる。

参考文献

高根町『高根町誌　通史編』（上巻、下巻）平成元年（1989 年）
松平定能『甲斐国志』復刻版　天下堂書店　昭和 41 年
山梨教育会北巨摩支会『北巨摩郡誌』大正 4 年
上野村郷土誌研究会『上野村誌』吉川弘文館　昭和 29 年（1954 年）
杉浦明平『海の見える村の一年－新農村歳時記－』岩波新書　1961 年
杉浦明平『農の情景－菊とメロンの岬から－』岩波新書　1988 年
宮本常一『忘れられた日本人』岩波文庫 1998 年
上久保達夫『農山村地域生活者の思想－事例による実証的研究』御茶の水書房　2004 年
古川彰『村の生活史』世界思想社　2004 年
高根町役場『八ケ岳南麓物語－高根町 50 年のあゆみ』2004 年
http://www.pref.yamanashi.jp/barrier/html/syoukosom

図 1高根町の位置

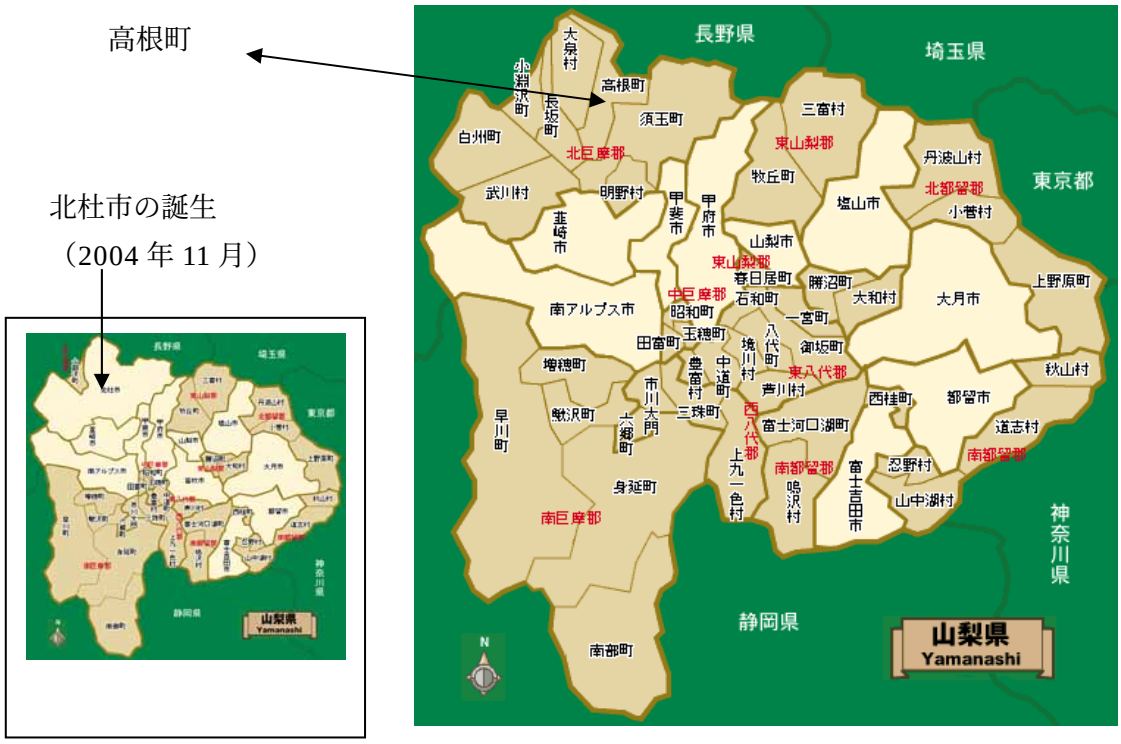


図 2高根町南部

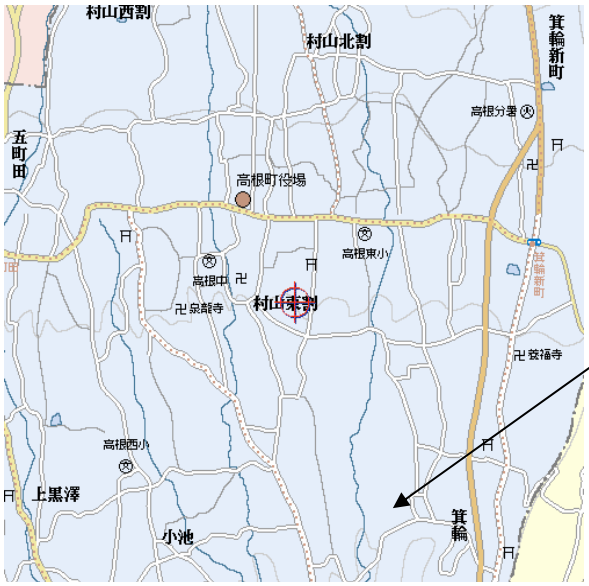
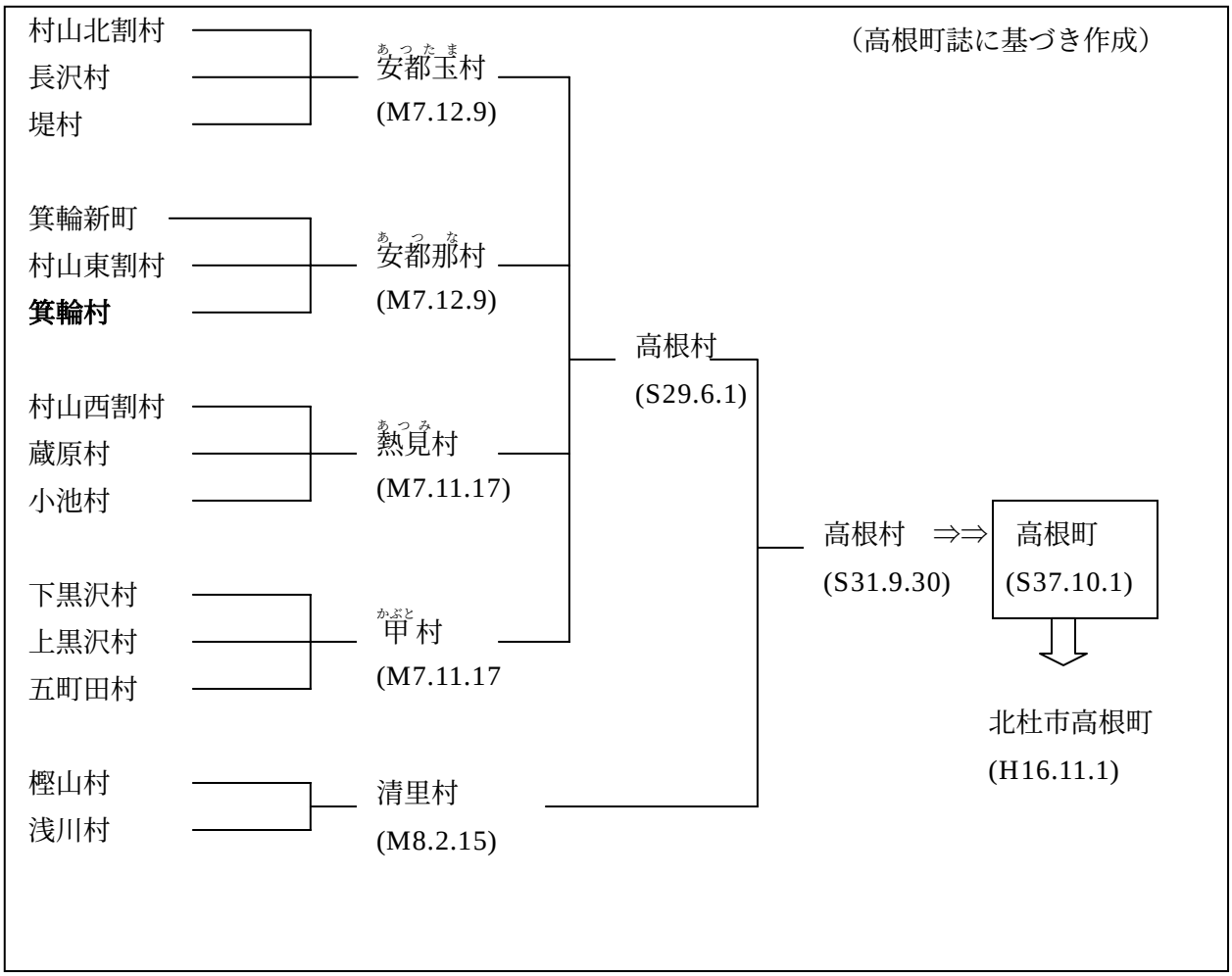


図 3箕輪大坪

出典：Yahoo!地図情報

表 1高根町の成立


（高根町誌に基づき作成）
村山北割村
長沢村
堤村
安都玉村
(M7.12.9)
箕輪新町
村山東割村
箕輪村
安都那村
(M7.12.9)
村山西割村
蔵原村
小池村
熱見村
(M7.11.17)
下黒沢村
上黒沢村
五町田村
甲村
(M7.11.17
樫山村
浅川村
清里村
(M8.2.15)
高根村
(S29.6.1)
高根村 ⇒⇒ 高根町
(S31.9.30) (S37.10.1)
北杜市高根町
(H16.11.1)